

## 巻頭言

## 研究における不正行為に揺れた 2014 年

2014 年は研究不正に揺れた一年であった。2014 年 12 月 19 日号の Science 誌は、2014 年の大失敗 (Breakdown) のひとつに、「STAP 不正問題 (Stem cells made easy?)」を挙げている。まさに STAP 細胞で明け、STAP 細胞で終わる 1 年であった。一方で、降圧薬バルサルタンをめぐる一連の論文不正事件が最終局面に入った 1 年でもあった。

2014 年 1 月に理化学研究所の小保方晴子研究員らが、マウスの分化した細胞に弱酸性溶液に浸すなどの外的刺激を与えることにより、再び分化する能力を獲得させることを発見し、STAP 現象として Nature 誌に発表した。当初は iPS 細胞を超える大発見とされ、世界中から大いに注目された。ところが間もなく、小保方研究員の博士論文に、ウェブサイトに掲載されていた内容や他の研究者の論文の内容が、引用元を明示せずにコピー・アンド・ペーストされていること (盗用) が指摘され、さらには Nature 誌の論文の画像が博士論文の画像と酷似していることも指摘された。このような疑義により、7 月に Nature 誌の論文は撤回された。その後も再現実験を続けていた理化学研究所の調査委員会は 12 月、すでに認定していた 2 つの図の改竄と捏造以外にも、さらに 2 つの図に関して捏造があったと認定し、「STAP 現象は ES 細胞の混入である可能性が非常に高い」「ES 細胞を誰が混入したかは決定できない」という、狐につままれたような幕引きとなった。

ノバルティスファーマ社が製造販売しているバルサルタンの複数の大規模臨床研究において、同社の社員が身分を秘匿して統計解析者として関与した利益相反 (COI: Conflict of Interest) 問題と、結果の解析において人為的な操作 (改竄) が確認された。その結果、複数の論文が撤回されただけでなく、これらの論文を引用して販売促進を行ってきたことに関し、統計解析者が薬事法違反 (誇大広告) の容疑で逮捕されるに至った。日本の臨床研究の信頼性を根底から揺さぶった大事件は、このまま終焉を迎えるのか。

研究における不正行為の多発を踏まえ、「研究活動の不正行為への対応のガイドライン」の見直し・運用改善や、「研究機関における公的研究費の管理・監査のガイドライン」の改正が行われ、不正防止に関する教員へのコンプライアンス教育が実施された。科学の世界は、ほとんどの研究者が真面目に研究をしているという「性善説」で成り立っており、論文のひとつひとつを疑いの目で見ることなど、実際には不可能である。真面目な研究者が研究しづらくなる事態は回避されなければならない。

さて、広島国際大学看護学ジャーナルの第 12 巻を刊行することになった。ご投稿いただいた先生方と査読の労をお取りいただいた先生方に深謝するとともに、第 13 巻にはさらに多くの先生方から論文をお寄せいただくことに期待したい。

2015 年 3 月

広島国際大学看護学部 学部長  
看護学部学術誌 編集委員長 島谷 智彦